

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：32658

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2020

課題番号：19K13228

研究課題名（和文）普遍的な等位構造と並列構造の解明に向けた比較統辞論研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of Syntax for the Investigation of Universal Coordinate and Parallel Structures

研究代表者

小林 亮一郎 (KOBAYASHI, Ryoichiro)

東京農業大学・国際食料情報学部・助教

研究者番号：80824143

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、3つの異なる構文(a) 等位接続表現、(b) 同定コピュラ文、(c) from-to構文の統辞的特性を調査した。これらの構文は以下の制約に従うことを主張した：

[Generalized Coordinate Structure Constraints] 等位接続表現、同定コピュラ文、from-to構文では、(i)その構成要素は移動できず、(ii)その構成要素に含まれるいかなる要素も、その構成要素から移動することはできない。

さらに、(a-c)は同じ構造を共有することを提案した。具体的には、XP-YP構造を形成し、そこから対称性を破ってXPもしくはYPが移動することで派生すると主張した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語と英語を中心とした比較統辞論研究の手法を用いて、等位接続文、（同定）コピュラ文、そしてPath構文（from-to constructions）の構造について、統一的な分析を与えた。これらの構文はこれまで、一部の研究を除き、関連付けられることは無かった。本研究課題の研究成果によれば、これらの構文の背後には、共通した「並列構造」が存在することになる。本研究課題の研究成果は、これまで研究がされてこなかった現象に新たな光をあてただけではなく、通言語的に存在する「等位構造」が、実は等位接続文以外の背後にも存在する、より一般的な構造であることを強く示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the syntactic properties of three different types of constructions: (a) Coordination, (b) the equative copula construction, and (c) from-to constructions. The aim of this study is twofold: First, it is argued that they obey the same parallelism constraint, which I dub the generalized Coordinate Structure Constraint (CSC: cf. Ross 1967). Second, I suggest that the three types of constructions share the same syntactic structure. I demonstrated that coordination, the equative copula construction, and the from-to construction obey the generalized CSC in English and Japanese.

[Generalized CSC] In coordination, equative copula and from-to constructions, (i) no component may be moved, (ii) nor may any element contained in a component be moved out of that component. The parallelisms observed imply that the three different constructions share the same syntactic structure. I specifically claim that they are derived via symmetry-breaking movement from XP-YP structure.

研究分野：統辞論

キーワード：統辞論 等位構造 並列構造 コピュラ文 寄生空所文 等位構造制約 全域的移動 &P分析

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生成文法の枠組みにおいて広く議論される等位構造の特性に、下記(1)の「**全域的移動**」が知られる。通常は、移動する要素とその痕跡は一对一の対応をする。しかし、(1)では、2つの等位項から what が抜き出されており、what と痕跡との間に一对一ではなく、一対他の対応が見られる。全域的移動はその特殊性から、等位構造特有の現象であると考えられてきた(Williams 1978)。

(1) What did Mary [send *t* on Wednesday] and [receive *t* on Monday]? (*t* は移動の痕跡)

_____ | _____ |

(cf. Kato 2006)

実際は、等位接続表現の他にも、移動する要素とその痕跡が、一对一ではなく一対他の対応をする構文が存在している。(2)では which book が2つの空所に対応している。このような表現は「**寄生空所文**」と呼ばれる。寄生空所文における複数の空所もまた、等位接続表現と同様、全域的移動の結果であると Williams (1990) は主張した。しかし、(2)においては、it が随意的に空所位置に現れることができる。そのため、等位接続表現とは根本的に性質が異なるという反論があり、議論は平行線を辿っている(Postal 1993, Huybregts and van Riemsdijk 1985 他)。

(2) Which book did Peter burn *t* [without reading *e*]?

(*e* は空所を示す)

_____ | _____ |

このような背景の中、Kobayashi (2018a, 2018b) は、from と to から成る、下記の(3a)にある「**Path 構文**」(*from-to constructions*) においても同様に、(3b)の全域的移動が起こることを日英語で観察した。Williams (1994) の洞察を捉え、Kobayashi (2018a, 2018b) は、Path 構文と等位接続表現との類似点を指摘した。また、(3c)のコピュラ文についても、(3d)の様に全域的移動が許容されることが、独立に指摘されている(Heycock and Kroch 1999, Asada and Kato 2011 他)。

(3) a. John played the banjo [from the east of Alabama] [to the west of Louisiana].

b. What did John play the banjo [from the east of *t*] [to the west of *t*]?

_____ | _____ | (Path 構文)

c. [Your grade in Syntax II] is [my grade in Phonology I].

d. Which class is [your grade in *t*] [my grade in *t*]?

_____ | _____ |

(コピュラ文)

これらの観察は、全域的移動を許容する表現が、等位接続文や寄生空所文以外にも広く存在する可能性を示唆している。このような背景から、本研究課題を着想し、遂行するに至った。

2. 研究の目的

上述の研究背景の中、等位接続表現との類似性(全域的移動を許すという特性など)が指摘される「寄生空所文」、「コピュラ文」、そして「Path 構文」を分析することにより、本研究課題では、「等位構造が等位接続表現に限定されることのない、より一般的な構造である」という仮説を立て、それを検証することを目的として定めた。

寄生空所文が、等位接続表現と似た振る舞いを見せるという指摘は、古くから存在する(Williams 1990 他)。しかし、等位接続表現と同様の構造を持つかどうかは意見が分かれており、未だ決着を見ていない(de Vries 2017)。(先行研究の殆どが、英語など西洋諸語の観察のみに基づいていることも指摘しておきたい。)本研究課題は、日英語の比較統辞論研究の手法を用いて、コピュラ文と Path 構文を含んだ他の現象にも観察を拡げることにより、等位接続表現との比較を通じて、これらの構文を総合する一般的な「**並列構造**」の提案を目指したものである。

3. 研究の方法

本研究課題では、等位接続とその他の全域的移動を許容する構文を分析することで、等位構造が等位接続に限られた特殊な構造であるという従来の想定を再検討し、より一般的な「**並列構造**」の提案を目指した。この目的を達成するため、3つの課題を設定した。(i) Path 構文の記述と統辞的分析; (ii) 日本語における寄生空所文の記述と統辞的分析; (iii) より一般的な構造の提案

等位接続表現については、その意味と音に課される制約の研究については、一定の成果が得られている(Fox 2000, Kato 2006 他)。しかし、その構造についての解明は進んでおらず、脇に置かれる形となっていた。本研究課題は、等位接続の普遍的な構造の解明を目指すとともに、等位構造研究の射程の外にあった、他のいくつかの構文について観察を拡大した。

英語のコピュラ文については、先行研究に一定の蓄積がある(Moro 2000 他)。これらを基に、日本語のコピュラ文についても同様の構造が妥当であるかを検討した。Path 構文については、

日英語ともに統辞論の先行研究が殆ど存在しなかった。まずは Kobayashi (2018a, b) の観察した、振る舞いの異なる 2 種類の Path 構文についての記述的一般化の提案を試みた。その上で、分裂文や束縛変項などの統辞テストを用いて、構造の分析に取り組んだ。

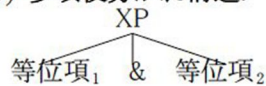
寄生空所文については、先行研究の殆どが西洋諸語の観察に基づいていた。その中、Takahashi (2006) は日本語にも寄生空所文が存在する可能性を指摘し、(4) のデータを提示している。しかし、日本語は名詞句が自由に省略されるため、空所 [e] が移動の痕跡であるのか、省略された名詞句であるのか、さらなる検証が必要である (Abe 2011)。

(4) e 読んだ学生が t うんざりしたのは、どの論文にですか？

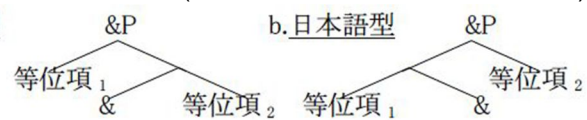
Takahashi と Abe が示したデータについて再検討し、日本語にも英語と同様の寄生空所文が存在するのかを考察し、本研究において寄生空所文を等位接続表現との比較対象にすべきかどうかを検討した。(結果としては、研究計画の遅れから、「寄生空所文」については十分な記述と分析を行うことができなかった。そのため、上記の (i) と (iii) に傾注し、中核となる研究課題の達成に向け、計画の修正を行った。)

等位構造については、先行研究において 2 種類の異なる分析が提案されている。本研究課題では、どちらがより妥当な分析であるかについて再検討した。具体的には、(5) の等位項が階層的に対称を成す構造と、(6) の非対称的な構造が提案されている (Munn 1993, Johannessen 1998 他)。

(5) 多項枝分かれ構造: (6) &P 分析: a. 英語型



b. 日本語型



研究代表者が本研究課題に取り組む以前の研究においては、より妥当な構造の提案をすることができていなかった。これは研究計画の不十分な点であり、「等位接続のみに観察対象を絞った方略」に問題があったことを示唆していると考えられた。これを解決するため、等位接続表現に類似する Path 構文やコピュラ文など、全域的移動を許す構文について、先行研究の調査と記述研究を進めてきた。これらの構文が等位接続表現と同様の特性(全域的移動など)を持つのであれば、より妥当な構造の分析は、これらの構文についても十分な説明を与える必要がある。上記の等位構造の分析を基に、(5)と(6)に必要な修正を加えながら、より説明力の強い構造の分析の提案を目指して、研究を行った。

計画が当初の予定通り進まない場合には、(i)と(iii)に傾注し、中核となる研究課題の達成に向け、調整する計画を立てた。結果としては、研究の遅れから(ii)に取り組むことはできなかった。そのため、1年目は「Path 構文の記述と統辞的分析」に注力し、等位構造と他の構文の比較に向けた準備を行った。2年目は引き続き(i)に着手し、(iii)に取り組んだ。研究の進捗状況に合わせ、国内外の学会における発表および論文投稿を行った。

4. 研究成果

Path 構文の記述と統辞的分析:

当初の計画通り、初年度は「Path 構文の記述と統辞的分析」に注力した。等位構造と(同定)コピュラ文、そして Path 構文の比較研究を行い、その成果を国際学会 (GLOW in Asia XII & Seoul International Conference on Generative Grammar 22) で発表し、プロシーディングス論文 (Kobayashi 2019) として出版した。

日本語と英語における Path 構文のデータとしては、(7)や(8)のような例文を分析対象とした。

(7) デモ隊が[子供から大人まで]行進していた。 (Kobayashi 2018b:2)

(8) The range of diabetes sufferers stretches [from children to adults].

(Kobayashi 2018a:76)

Path 構文については、日本語と英語ともに、統辞論の先行研究が殆ど存在しないため、まず日英語のデータを観察し、かきませ文や分裂文、束縛変項などの統辞テストを用いて、Path 構文には 2 種類の下位分類が存在するという論じた。(7)と(8)は、「from NP/NP から」と「to NP/NP まで」が分離不可能な「Path 構文」であるが、(9)や(10)のようなデータはそれらが分離可能であるため、「疑似 Path 構文」として区別をした。これまで殆ど記述のなされていなかった Path 構文について、日英語における記述研究を行ったことで、言語研究一般に対して実質的な貢献を行うことができたと考えている。

(9) 裕子が東京から名古屋まで新幹線に乗った。

(10) John took Shinkansen from Tokyo to Nagoya.

(Kobayashi 2019)

より一般的な構造の提案:

本研究課題では分離ができない Path 構文に研究対象を絞り、その構造の分析を行った。等位構造における(6)のような「非対称的な構造」(&という主辞が&Pを形成する分析)を Path 構文の構造分析に援用し、Kobayashi (2019)では、「&」という主辞が Path 構文にも存在しているとい

う主張を行った。構造は以下の(11)の通りである(cf. Chomsky 2013)。

(11) { PP1, { &, { PP1, PP2 } }

(Kobayashi 2019)

Kobayashi (2019)の主張する構造は、Path 構文が Ross (1967)の Coordinate Structure Constraints を一般化した “Generalized Coordinate Structure Constraints” (12)に従うという観察によっても裏付けられる。

(12) 等位接続表現、同定コピュラ文、Path 構文では、(i)その構成要素は移動できず、(ii)その構成要素に含まれるいかなる要素も、その構成要素から移動することはできない。

(Kobayashi 2019)

等位接続表現、(同定)コピュラ文、そして Path 構文という、一見関連の無さそうな複数の構文に対して、それらが「抜き出し」について同様の振る舞いを見せるという指摘は、これらが同一の構造を持つ可能性を強く示唆している。

並列構造とその主辞（機能範疇）の同定：

と の研究成果にあるように、本研究課題における Path 構文の分析を踏まえると、Johannessen (1998)他の(6)「非対称的な構造」(&という主辞が&Pを形成する分析)の方が、(5)の対称的な「多項枝分かれ構造」よりも、理論的に望ましいと考えられた。その成果をまとめた学会発表が、*Japanese/Korean Linguistics 28*(オンライン)にて採択された。しかし、学会運営側からの重要な連絡が、発表日直前まで届かず、当日の発表については残念ながらキャンセルせざるを得なかった。そのため、 については現在、その成果を発表できる他の学会に応募することを検討している。

「非対称的な構造」を提案した際、Kobayashi (2019)では、Path 構文における PP1-PP2 全体の主辞を「&」として提案した。しかし、構文 A と構文 B の構造が類似していることは、もちろんそれらの主辞が同一であることを必ずしも含意しない。Path 構文の主辞は、等位接続表現と同様に「&」という機能範疇であるのか、それとも *p* などといった別の機能範疇であるのかという問いについては、今後の研究の中で明らかにしたいと考えている。

引用文献：

- Abe, J. 2011. Real parasitic gaps in Japanese. *JEAL* 20.
- Asada, Y. & T. Kato. 2011. Copular sentences and coordinate structures. *WECOL* 20.
- Chomsky, N. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130.
- de Vries, M. 2017. Across-the-board phenomena. In *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*. Blackwell.
- Fox, D. 2000. *Economy and Semantic Interpretation*. MIT Press.
- Heycock, C. & A. Kroch. 1999. Pseudocleft connectedness: Implications for the LF interface level. *LI* 30.
- Huybregts, R. & H. van Riemsdijk. 1984. Parasitic gaps and ATB. *NELS* 15.
- Johannessen, J. B. 1998. *Coordination*. Oxford University Press.
- Kato, T. 2006. Symmetries in coordination. Doctoral dissertation, Harvard University.
- Kobayashi, R. 2018a. On two types of from-to PPs in English and the parallelism in syntax. *JELS* 35.
- Kobayashi, R. 2018b. The syntax of path/range PP constructions in Japanese. *J/K 25* (Online Proceedings).
- Kobayashi, R. 2019. Notes on coordination, copulas, and from-to Constructions. *GLOW in Asia XII & SICOGG 22*.
- Moro, A. 2000. *Dynamic Antisymmetry*. MIT Press.
- Munn, A. 1993. Topics in the syntax and semantics of coordinate structures. Doctoral dissertation, University of Maryland.
- Postal, P. 1993. Parasitic gaps and the across-the-board phenomenon. *LI* 24.
- Ross, J. R. 1967. Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.
- Takahashi, D. 2006. Apparent parasitic gaps and null arguments in Japanese. *JEAL* 15.
- Williams, E. 1978. Across-the-board rule application. *LI* 9.
- Williams, E. 1990. The ATB theory of parasitic gaps. *TLR* 6.
- Williams, E. 1994. *Thematic Structure in Syntax*. MIT Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Kobayashi, Ryoichiro.	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 The Uniform Hypothesis of Ni-passives in Japanese and Movement into -position	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi, Ryoichiro.	4. 巻 -
2. 論文標題 A Case against the Verb-Stranding VP-Ellipsis Analysis in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 298-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi, Ryoichiro.	4. 巻 -
2. 論文標題 Labeling the Unlabelable in the CP Domain	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the Western Conference on Linguistics 2020	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi, Ryoichiro.	4. 巻 21
2. 論文標題 Notes on Coordination, Copula, and From-To Constructions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th GLOW in Asia & the 21st SICOGG	6. 最初と最後の頁 145-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kobayashi, Ryoichiro.
2. 発表標題 A Case against the Verb-stranding VP-Ellipsis Analysis in Japanese
3. 学会等名 The 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kobayashi, Ryoichiro.
2. 発表標題 Labeling the Unlabelable in the CP Domain
3. 学会等名 Western Conference on Linguistics 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kobayashi, Ryoichiro.
2. 発表標題 Notes on Coordination, Copula, and From-To Constructions
3. 学会等名 GLOW in Asia XII in Seoul and SICOGG XXI (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 渋谷和郎、野村忠央、女鹿喜治、土居 峻 [編]	4. 発行年 2020年
2. 出版社 DTP出版	5. 総ページ数 269
3. 書名 今さら聞けない英語学・英語教育学・英米文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

個人ホームページ
<https://sites.google.com/site/ryoichirokobayashi/>
Researchmap
<https://researchmap.jp/ryoichirokobayashi/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------